

國學院大學学術情報リポジトリ

学生の集団・自然体験学習に関する一考察：
2009年度総合講座の学生アンケートの分析を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 夏秋, 英房, 宮川, 八岐 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001189

学生の集団・自然体験学習に関する一考察

—2009年度総合講座の学生アンケートの分析を中心に—

夏秋 英房、宮川 八岐

Study on the Educational Effects through the Group Stay Program in Nature for University Students
Natsuaki Hidefusa, Miyakawa Yaki

キーワード：総合講座 集団宿泊 自然体験 I K R 評価

1. 本稿の目的

総合講座（集団宿泊研修）は、「自然の中での集団宿泊や体験活動を通じて人間力を育成する」ことをテーマとして、人間開発学部の初等教育学科と健康体育学科の1年次生全員が必修科目として履修し、専任教員全員が引率に参加して実施された。実施したのは2009年9月14日から17日の3泊4日、新潟県妙高市にある国立妙高青少年自然の家が宿舎であり、主な活動施設であった。

本稿は、この総合講座の意義と効果を、学生アンケートの分析をとおして検証し、人間開発学部の核となる科目の1つとして今後の課題について考察するものである。⁽¹⁾

2. 総合講座のカリキュラム上の位置づけと目的および内容

総合講座は、國學院大学の教養総合科目（人間総合科目群）の1科目である。2009年度シラバスに記された本講座の目的は、以下のとおりである。

「本講座では、自然の中での宿泊施設を利用した長期宿泊を伴う校外研修を実施することにより、自然（環境）尊重の精神、人間関係構築力、課題解決能力、表現活動能力の育成という人間力育成における基盤的能力開発を図る。」

すなわち、人間開発学部のコア・コンピテンシーである人間力を開発する中核科目の1つとして本講座は位置づけられている。そのために、『妙高青少年自然の家』の施設を利用した3泊4日の宿泊を伴う校外研修を実施し、これらの諸能力の開発を図る」科目なのである。

具体的な内容としては、

まず事前指導として、人間開発学部専任教員の指導の下、プロジェクトの一部を学生に委ねることにより自主的・自発的な態度の養成を行う。
現地では非日常体験となる自然に触れ合う野外研修により、自然体験活動や仲間との協同活動などを通して、協調性・社会性・主体性・社交性などを養う。さらに、宿泊研修期間は身体表現力の指導を受けるとともに、その指導法を習得する。本講座の修了後には事後指導も行う。

つまり、①自然体験と②仲間との協同活動をととして、③自主的・自発的な態度をもって将来、指導者となる資質と態度を養うことに目的がある。そのためには、非日常的な環境で、登山といった困難な目標を協同で達成したり、協同性を養うプログラムを体験したり、学生が企画・実施する内容を準備した。プログラム開発にあたっては、妙高青少年自然の家の特任職員と入念な打ち合わせを数次にわたって行った。また出発前には、学生に直前ガイダンスを実施した。

主なプログラムは、【1日目】現地へ移動、アイスブレイク、社会教育施設にかかわる講義、【2日目】登山、【3日目】野外炊事、妙高自然の家独自の選択プログラム、学生企画によるキャンプファイアー、【4日目】冬季の妙高について講義、「オープン・ハート」事業の記録映像の視聴と講義、帰京、というものであった。ただし、2日目の登山は予想外の蜂の襲来により、別ルートへの変更を余儀なくされた。

それぞれの日の終わりに『しおり』にふりかえりを記入し、後期開始後に『しおり』を提出させ、そこに記された内容について各ルーム担当教員によりコメントの記入や評価を行った。

3. 総合講座の評価とその分析

(1) 総合講座のカリキュラムとしての評価方法

総合講座のカリキュラムとしての評価は、学生を対象とした事前・事後指導のアンケートと、日誌に記されたふりかえりの記事の内容、および引率に当たった専任教員に対する事後アンケートの内容を資料として実施した。

そのうち、学生を対象としたアンケートについては、事前調査は「直前ガイダンス」を開いた9月10日に実施し、事後調査は9月17日の現在での閉校式の際に実施した⁽²⁾。主な質問項目として、平成8年7月の中央教育審議会第一次答申に記された「生きる力」の定義にもとづいて橘直隆と平野吉直が開発した70項目からなる「IKR評定」尺度をもとに⁽³⁾、国立妙高青少年自然の家を中心に国立青少年教育振興機構が平成18年に開発した28項目からなるIKR評定の簡易版を使用した⁽⁴⁾。その理由は、IKR評定がキャンプや集団宿泊活動における効果を測定することを眼目としており、かつ、その簡易版は総合講座の利用施設である妙高青少年自然の家という場において開発された尺度だからである。

生きる力を構成する上位指標は①「心理的社会的能力」(中位指標として心理的エネルギー、社会的スキル、判断力)、②「徳育的能力」(中位指標として自己規制、情緒)、③「身体的能力」(中位指標として日常的行動、身体的耐性・野外への対応)の3つである。これらが14の下位指標に分けられ、28の調査項目に具体化されている(表1を参照)。

また事後アンケートにはIKR評定項目以外に、今までの体験研修への参加回数、今回の研修で担当した役割、選択したプログラムの内容、本講座で中核となるねらいをまとめた2つの質問、改善すべき点(自由記述)を項目に加えた。

(2)「生きる力」に関わるIKR評定〔簡易版〕28項目に見られる変化について

「生きる力」に関わる14の下位指標に対応した28項目について、「とてもよくあてはまる」を1、「まったくあてはまらない」を6として、事前・事後で回答を求め、各項目の平均値の「事後－事前」を計算し、4日間の講座による変化を数値化した（表1）。

学科ごとに平均値の事前から事後への変化を求めると（表1）、最大でも0.8前後とわずかなではあるが、ほとんどの項目で、事後に肯定的な方向へと変化したことが確認できた。とくに「早寝早起きである」「刃物を上手に使える」「暑さや寒さに負けない」「無駄遣いをしない」などの生活習慣や技能面、身体的耐性、自己規制の面で、両学科生共に自信を深めている。また、「小さな失敗を恐れない」「自分から進んで何でもやる」など人に依存せず積極的であることにも肯定的な変化が認められた。そのほか0.4以上の変化があった項目を拾ってみると、健康体育学科生は「誰にでも話しかけられる」「問題点や課題を見つける」など明朗性や視野・判断力などで肯定的な変化が認められ、自然体験学習の効果が大きかった。それに対して初等教育学科の学生は「花や風景など美しいものに感動できる」という自然への関心の深まりが見られた。

表1 「生きる力」を構成する指標とIKR評定項目の、事前と事後の平均値の変化(学科間の比較)

指 標		調 査 項 目	学 科 別				／ 学部全体	
中 位 指 標	下 位 指 標		初等教育学科		健康体育学科		合 計	
			平均値 の変化	標準 偏差	平均値 の変化	標準 偏差	平均値 の変化	標準 偏差
心 理 的 エ ネ ル ギ ー	1. 非依存	いやなことはいや とはっきり言える	.2340 *	1.07188	.2190 *	1.02826	.2261 * *	1.04646
		小さな失敗を恐れ ない	⑦ .3684 * *	.93459	⑧ .3868 * *	1.23111	.3781 * *	1.09833
	2. 積極性	自分から進んでな んでもやる	④ .3895 * *	1.02412	⑧ .3868 * *	1.10902	.3881 * *	1.06708
		前向きに物事を考 えられる	.1474	1.16663	.1765	1.00899	.1624 *	1.08516
社 会 的 ス キ ル	3. 明朗性	誰にでも話しかけ ることができる	.3263 * *	.92762	② .5189 * *	1.18105	.4279 * *	1.07052
		失敗しても立ち直 るのが早い	.2105 *	1.01996	.3824 * *	1.04402	.2995 * *	1.03345
	4. 交友・協調	多くの人に好かれ ている	.0851	1.05402	.1604	.85230	.1250	.95073
		誰とでも仲良くで きる	.1895 *	.91436	.3137 * *	.87857	.2538 * *	.89588
	5. 現実肯定	自分のことが大好 きである	.1789	.94508	.2358 * *	.86797	.2090 * *	.90339
		誰にでも挨拶がで きる	.0211	.79866	.0495	.97341	-.0153	.89142

判断力	6. 視野・判断	先を見通して自分で計画を立てられる	.2766 **	.93215	.2736 **	1.04684	.2750	.99212
		自分で問題点や課題を見つけられる	.2000	.99574	⑤ .4314 **	.89564	.3198 **	.94990
	7. 適応行動	人の話をきちんと聞ける	.1809	.94996	.1981 *	.97999	.1900 **	.96361
		その場でふさわしい行動ができる	.2105 **	.74226	.2451 *	.97935	.2284 **	.87108
自己規制	8. 自己規制	自分勝手なわがままを言わない	.3368 **	1.20822	.2925 **	1.09516	.3134 **	1.14729
		お金や物の無駄遣いをしない	⑧ .3474 **	1.12768	⑤ .4314 **	1.23889	.3909 **	1.18430
情緒	9. 自然への関心	花や風景など美しいものに感動できる	③ .4000 **	.96094	.3302 **	1.07546	.3632 **	1.02100
		季節の変化を感じることができる	.1474	1.10095	.3039 **	1.02241	.2284 **	1.06119
	10. まじめ・勤勉	いやがらずによく働く	.2000	1.04779	.3679 **	.91886	.2886 **	.98301
		自分に割り当てられた仕事はしっかりやる	.0842	1.05853	.0792	1.00681	.0816	1.02955
	11. 思いやり	人のためになにかしてあげるのが好きだ	.1789 *	.71428	.1132	.97903	.1443 *	.86260
		人の心の痛みが分かる	.2526 **	.83753	.0396	.82366	.1429 *	.83513
日常的行動	12. 日常的行動	早寝早起きである	① .7684 **	1.22433	① .8019 **	1.26054	.7861 **	1.24057
		身体を動かしても疲れにくい	.2842 *	1.12669	⑦ .4000 **	1.02494	.3436 **	1.07449
身体的耐性・野外への対応	13. 身体的耐性	暑さや寒さに負けない	④ .3895 **	1.20544	④ .4340	1.15486	.4129 **	1.17628
		とても痛い怪我をしても我慢できる	④ .3895 **	1.15127	.3333	1.33003	.3604 **	1.24419
	14. 野外生活・技能	ナイフ・包丁などの刃物を上手に使い	② .4737 **	.89730	③ .4717 **	.99721	.4726 **	.94895
		洗濯機がなくても手で洗濯できる	⑥ .3789 **	1.33830	.2157	1.15722	.2944 **	1.24729

※各項目の平均値の変化は、正の値で示してある。「対応のあるT検定」の有意確率 * : P<0.05、** : P<0.01
 ※※表中の○番号は、学科内で変化の大きさの順位を示したもので、同率は同順とした。

このように、同じ自然体験や集団宿泊体験であっても、2つの学科の学生の特質を反映して異なった効果が生まれていることがわかる。

また、男女別に事前事後の平均値の変化を比較してみると、「早寝早起きである」「刃物を上手に使える」の変化が大きいのは両性に共通であるが、平均値の変化の大きさに有意な性差が認められたのは、「自分勝手なわがままを言わない」(男子の変化：0.12<女子：0.55)、「だれとでも仲良くできる」(男子：0.38>女子：0.10) の2項目であった。

女子では、「自分勝手なわがままを言わない」「お金や物の無駄遣いをしない」「小さな失敗を恐れない」「暑さ寒さに負けない」といった、「～しない」という意味で自己規制的・忍耐的な項目に変化が見られた。それに対して男子では「誰にでも話しかけられる」「自分から進んでなんでもやる」「身体を動かしても疲れにくい」といった、明朗性や積極性をあらわす項目で変化が表れていた。集団宿泊体験のもつ効果の性差がうかがわれて興味深い。

表2 「生きる力」にかかわる項目の、事前と事後の平均値の変化（性別による比較）

	性別	平均値の 変化	標準偏差	平均値の 標準誤差	
自分勝手なわがままを言わない	男性	.117	1.18121	.11212	**
	女性	.556	1.06118	.11186	
お金や物の無駄遣いをしない	男性	.278	1.27399	.12259	*
	女性	.528	1.05626	.11196	**
小さな失敗を恐れない	男性	.270	1.17509	.11153	*
	女性	.511	.98579	.10391	**
暑さや寒さに負けない	男性	.378	1.32153	.12543	**
	女性	.456	.97337	.10260	**
誰にでも話しかけられる	男性	.478	1.08583	.10306	**
	女性	.367	1.05415	.11112	**
自分から進んでなんでもやる	男性	.478	1.06042	.10065	**
	女性	.278	1.07084	.11288	*
身体を動かしても疲れにくい	男性	.463	1.17947	.11349	**
	女性	.195	.91294	.09788	*
早寝早起きである	男性	.811	1.29694	.12310	**
	女性	.756	1.17379	.12373	**
刃物を上手に使える	男性	.441	1.00621	.09550	**
	女性	.511	.87723	.09247	**

※各項目の平均値の変化は、正の値で示してある。「対応のあるT検定」の有意確率 *：P<0.05、**：P<0.01

※※上の4項目は女子に、中段の3項目は男子に、下の2項目は両性共に変化が大きかった項目である。

以上、児童・生徒に用いられることが多いIKR指標を使って大学生の集団・自然体験学習が「生きる力」を構成する能力や態度を育成する効果を検証してみた。改めて表1により学部全体の平均値の変化をみると、28項目中24項目で有意な肯定的変化が認められた。「自然の中での集団宿泊や体験活動を通じて人間力を育成する」ことをテーマとしている総合講座が、初年次ではあったとしても一定の成果を挙げられたことを示すものと言えるだろう。IKR尺度が総合講座の科目評価の指標の1つとして有効であることは、この評定尺度が妙高青少年自然の家での活動を中心にして開発されたものであることとも無縁とは言えないだろう。

ただし、有意性があるとはいえ、事前と事後の変化の度合いはそれほど大きくはない。今後、総合講座のプログラムを開発するために、2つの学科の特性を活かしてより効果を高める工夫をすると同時に、大学生の「人間力」に対してより適切な評価尺度を考案していく必要があるだろう。

(2) 協同意識と、指導者としての自覚の育成

今回の総合講座をつうじて「他の人と力を合わせることを学んだ」「体験学習を指導することの難しさと奥深さを知った」と思うかどうかを、「とてもそう」から「ぜんぜんそうではない」の4検法で尋ねた(図1)。

いずれも「ぜんぜんそうではない」を選んだ学生はおらず、「あまりそうではない」も2～3%に過ぎなかった。2項目とも、大部分の学生が肯定的に捉えており、その意味では他者との協同と指導者としての自覚の育成を目指した総合講座の意図は、ある程度達成されていると言えるだろう。今後は、指導者としての意識と態度をさらに醸成していく方法を考える必要がある。

学科間で比較しても2つの項目の回答傾向に有意差はなかったが、性別で比較すると、「他の人と力を合わせることを学んだ」という項目では有意差が認められ、初等教育学科の女子学生の支持率が男子学生より30%ほど高かった(「とてもそう」男性53.7<女子83.3、 $P<0.01$)。これは、IKR評定の下位指標11の「思いやり」の2項目について、初等教育学科生が有意な変化を見せていることと関連しているだろう。

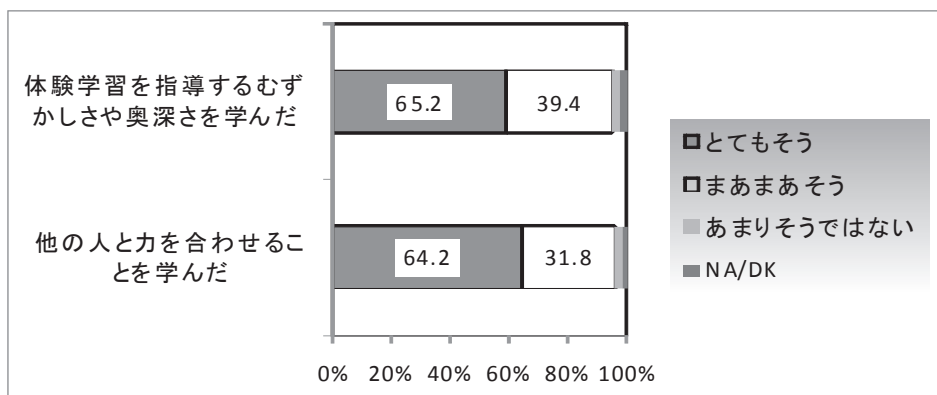


図1 総合講座をつうじて学んだこと

(3) 学生が挙げる改善点

自由記述では「来年の学生のためにはこうしたらいいと思うことを2つ挙げてください」と問うた。主な回答内容をまとめてみると、以下のようである。

〔事前準備について〕妙高の地域や自然・登山についての予備学習、プログラムや行事の企画・運営への学生の参画など。

〔実施中について〕登山の実施の要領の改善、時間の効率的で有効な使い方、2つの学科の学生の交流の充実、ルームなどの人間関係を深める方策、教員と学生の情報の共有、学生の生活態度の注意点など。

4. 総合講座の今後の課題

以上、本年度実施後の学生及び専任教員の評価を踏まえ、二年次の改善計画の策定方針（課題）を次のように考え、妙高集団宿泊研修実施委員会により検討を進めている。

- (1) 事前指導の充実：9月中旬に実施する方針は変えず、7月と9月の事前指導の回数を増やし、学生の準備活動の充実を図る。
- (2) 学生の実行委員会の組織づくりと運営方法の改善：『妙高体験研修のしおり』に具体化される実施計画の作成段階から、学生の組織を生かし、ルーム毎の活動や3泊4日のプログラムの編成・実施が、より学生主体になるようにし、教職員組織も一層機能的なものになるよう改善する。
- (3) 活動プログラムの改善と充実：メイン活動の登山をコース選択制にすること、全員共通体験の活動プログラムの内容の改善を図り、体験研修全体の充実と向上を目指す。
- (4) 意識調査・評価の工夫と改善：本年度実施の反省等を踏まえ、本学部、本講座の特質をより生かす意識調査の内容及び方法、そして教職員の評価の仕方について研究する。

【注】

- (1) 本稿は第1節から第3節までを夏秋が、第4節を宮川が執筆を担当した。また、本研究は2009年度國學院大學特色ある教育研究「新しい教員養成をめざす導入教育の創造」(代表：柴田保之)の一環として行われた。
- (2) 事前・事後アンケートは学生番号の記入によりベアリングをしたが、一部誤記入があった。そのため回収総数は事前アンケート205票、事後アンケート217票であるが、ベアリングできた有効票は201票（初等教育学科95票、健康体育学科106票）である。
- (3) 橘直隆、平野吉直「生きる力を構成する指標」、『野外教育研究』第4巻第2号、平成13年、pp.11-13。
- (4) 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立妙高青少年自然の家『平成19・20年度国立妙高青少年自然の家調査研究事業「長期宿泊体験活動に対応する学校教育のカリキュラム開発と有効性に関する調査研究」報告書（有効性の分析編）』、平成21年。

(なつあきひでふさ・國學院大學人間開発学部初等教育学科教授、みやかわやき・同学科教授)